

主よ、その水をください

(ヨハネによる福音書 4 章 15 節)

耳を傾け、共に歩む生き方を深めよう

サレジオ家族年間目標 ストレンナ 2018

はじめに - I. 無関心ではいさせない出会い：“耳を傾けること” - 「受容」であり、「その人との出会い」である、耳の傾け方 - II. 人を前進させる出会い：「識別」 - 「信仰と愛の喜びへの召命 - 識別の賜物 - III. 人生を変える出会い：“共に歩む同伴” - イエスのように共に歩む - 若者の教育者、霊的指導者であるドン・ボスコ - IV. どのような司牧を目指す？ 教皇フランシスコの提案する召命識別 - V. サマリアの女と共に

はじめに

全世界のサレジオ家族の兄弟姉妹の皆さん、

伝統に従い、私は年の終わりにサレジオの姉妹、扶助者聖マリアの娘たちにストレンナを示し、その日からストレンナは世界中の全サレジオ家族への贈りものになります。ストレンナとその解説の目的は、私たちが一つの心になって、私たちのあらゆる事業で行われている多くの取り組みと、サレジオ家族の各グループがそれぞれの固有のカリスマにおける召命にしたがい果たすよう呼ばれている使命に、目を注ぐよう助けることです。

選ばれたテーマは前年のテーマを引き継ぎ、また開催が予定されている大きな教会行事、世界代表司教会議（シノドス）第 15 回通常総会に関連するものです。このシノドスは教皇フランシスコにより、2018 年 10 月に行うために招集され、テーマは「若者、信仰、そして召命の識別」です。

この主題は私たちのカリスマの中心に直接かかわるものであり、そのために私たちは、意識を高め、多くの信徒と若者が教会生活のこの重要な出来事を、それに参加することの必要性を認識できるようにしながら、できるかぎり良い準備をするように努めたいと思います。このシノドスによって「教会は……どうしたら若者がいのちと愛の充満への招きに気づき、受け入れることができるか、彼らを導く方法を考察することにしました。それと共に教会は、今日、福音を告げ知らせるための最も効果的な方法を識別する際に、若者の助けを求めることにしました。」¹

今年皆さんに贈るストレンナは、シノドスの準備文書に打ち出された目標を、私たちが働く世界中のあらゆる場で、サレジオ家族として達成できるように助けるものとして示されます。

選ばれたテーマは、シンプルで非常に直接的な表現のものだと私は思いますが、現代社会においてきわめて重要な二つの要素を含んでいます：耳を傾けること、そして個人への同伴、共に歩むことです。この二つの側面に光を投げかけるため、福音から一つの美しいイコンを皆さんに示します。それはさまざまな黙想にうってつけのもの：イエスとサマリアの女のイコンです。

¹世界代表司教会議(シノドス)第 15 回通常総会「若者、信仰、そして召命の識別」準備文書と質問票, p.2, 2017 年, カトリック中央協議会訳, 以後 PD と表記.

一つのエピソードが語られます。民族の違いと宗教の敵対的状况にもかかわらず、その出会いは人格の最も深いところで起こります。人生が変えられるほどに。

年ごとの前向きな開かれた心でストレンナを受け取るよう、そして、私たちが働くそれぞれの司牧の状況にしたがい役立つと思われることから利益を得るよう、皆さんを招きます。

この4年近くの間、五大陸の若者たちとの何百回もの会合から、私は確信するようになったと皆さんに証言できます。サレジオ家族のグループが世話をする支部や事業には、おびただしい数の良い心の若者たち、いのちが開かれ、人間として形成されることを、学ぶことを望む若者、探求する若者たちがいるという確信です。その若者たちの多くは広く惜しみない心を持ち、人に仕えたい、人のために何かしたい、自分をささげたいと願っています。

彼らは、成長を続け信仰において成熟するために私たちの助けを願う若者たちです。そのほかにも、言葉に出して願うことはなくとも、個人的に出会うこと、耳を傾けて聞いてもらうことの必要性を深く感じている若者たちがいます。

個人的に、また共同体の中で、識別と同伴の歩みをたどりたいと望む若者はたくさんいます。

そこで私は自問します：私たちは何をしているのか、と。私たちのところに来るすべての若者と、彼らの人生で最も大切なことに関して共に歩むために、今よりもっと必要に応える開かれた姿勢を持つと、なぜ私たちは決断しないのでしょうか。私たちが引きとめているものは何なのでしょう。このことが教育と福音化の真の優先事項であるにもかかわらず、なぜほかのことで「忙しく」、ほかのことに「時間をかけている」のでしょうか。

愛する兄弟姉妹の皆さん、何をするかということよりも、自分たちが何であるか、何者であるかということのほうが大切だと真に納得するとき、そのときこそ私たちは、より多くの意義深い歩みをたどるようになるでしょう。思春期の若者や青年、その家族に差し出す物や活動よりも大切なのは、共にいる私たちの存在、私たちが耳を傾けること、対話に開かれていることなのだと。このことこそが、いつまでも残る「いのちを生きた跡」を刻むのです。若者とその家庭のうちにそれを残すのです。

こういったことすべてが今年のストレンナの土台にあり、その真の深い動機を形作っています。

I. - 無関心ではいさせない出会い：“耳を傾けること”

ここからは、「イエスとサマリアの女」として知られている聖書の箇所を、心静かに黙想しながら読むことへと皆さんを招きます。このイコンは、主がどのようにサマリアの女との関係を築くか、イエスとの出会いがこの女性の人生にどのような結果をもたらすか、私たちの理解を助けてくれるでしょう。

サマリアの女が水をくみに来た。

イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。

(弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。)

すると、サマリアの女は、

「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、

どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。

(ヨハネ 4・7-9)

イエスと名もないサマリアの女は異なる民族の出身です。両民族は歴史を通して違いを生きてきました。そして互いに相手を、イスラエルの古い信仰から根本的に離れてしまったと見なしています。両民族の家々が、社会的、宗教的、政治的な観点から相手を敵と見なしていたことを私たちは確認することができます。それは両者が異なっていたからではなく、まさにとても似通っていると同時に対立していたからです：自分たちがいにしえのイスラエルの本家本元の宗教の、

真の担い手、守り手であると、それぞれが信じていました。実際、両民族は、互いに相手を偽ものと考えていました。

主人公はこの人たちです。

井戸にやって来たサマリアの女は、イエスの出自に疑いようもなく気づきます。その服装の特徴から、イエスはユダヤ人です。サマリアの女にとってイエスは見知らぬ異邦人です：イエスは渴いていて、水がめを持っていません。深い井戸の水をイエスは汲むことができません。他方、女は見知らぬ人物を前にしているだけではありません。彼女の前にいるのは、宗教的観点から言えば、“競争相手”です。

同時に、この物語全体からわかるのは、この女性が抑えめに言っても疑わしい評判のある人物で、“まっとうな道から外れた”人生の状況にあるということです。人々の拒絶の犠牲になっていることを、この女性が痛みとして感じていると推察できます。

さらに、イエスとサマリアの女の間には、強い民族的、宗教的な偏見が横たわっています：当時の習慣によれば、この女性に水を願うイエスの行動は、^{とが}咎めるべき、非常識なものです。

この女性がイエスの前で安全だと感じていることを合理的に推測できます。イエスは同じ村の人間ではなく、「彼女の人生の失敗」を知らず、また異端ではあっても近い宗教に属する人です。イエスは彼女の共同体のイスラエル-サマリア人指導者と接触する機会はないでしょう、したがって彼女は、恐れたり心配したりする必要が何もありません。

この状況から、私たちにとって大いに関心をもてるいくつかの要素を引き出すことができます：この出会いは世俗の場所、“野外”で、田舎の風景の中の井戸端で起こります。そこが、*神との出会いの場*になります。

この出会い、耳を傾けること、最初の対話の、主人公、第一の主体であるイエスは、この出会いの戦略を“立て”、見抜き理解しておられる相手とその状況に耳を傾けることから始めます。

主のこのお手本は、私たちにとって非常に注目すべきものです。

「受容」であり、「その人との出会い」である、耳の傾け方

耳を傾けることは、常に術^{すべ} art です。「わたしたちは、聞くだけではなく、聴くすべを身につける必要があります。聴く技術はまず、他者とのコミュニケーションの中で寄り添うことのできる心の力で、これがなければ真に霊的な出会いにはなりません。」² この理由から、特に人間関係の中で、言葉を語る力は「耳を傾ける知恵」と対を成さなければなりません。

この耳を傾けることは、私たちサレジオ家族の使命において、実に重要なことですが、*出会い*がその出発点でなければなりません。出会いは、人と人の絆、人間らしくなることの機会となり、完全な自由のうちに生きられるものです。「キリスト教生活をはぐくむためのいやしと解放と励ましを与えるまなざしを注ぎながら、そばにいてることを感じさせ」³ ながら。

十代の若者や青年、私たちのもとで学ぶ生徒たち、さまざまな現場の家族との関係において、真に耳を傾げるために、いくつか注意しなければならないことがあります：

- 他者に開かれた心を育む：私たちの人格全体をもって開かれていること。もちろん耳で聞きますが、真に聞くとき、私たちは目で、精神を傾けて、心で、存在全体で、互いに耳を傾け合うこともできます。
- 人が伝えることに集中して注意を傾け、伝えようとしていることを積極的に理解するよう努めること。私たちが耳を傾けるとき、その土台は相手への深い尊敬であるからです。
- 若者であっても大人であっても、その人が探し求めていること、自分自身に期待していることへの真実な関心をもって、真の共感をもってその人と共に歩むこと。それは冷たい形式的な礼儀とは正反対の姿勢です。相手と一つになり、共に歩むことです。
- 相手の世界にできるかぎり近づくため、自分の世界を脇に置くこと、介入することなく共に歩めること。

² 福音の喜び, 171.

³ 同, 169.

- 端的に言えば、耳を傾けることは、人に、その人の葛藤、弱さ、喜び、苦しみ、期待に、気遣いをこめて注意を傾けることを要するわざです。実際、私たちは何かについて聞くだけでなく、その人に耳を傾けるのです。イエスの、民との出会いについて伝える福音書の数々のページには、この気遣いをこめて注意を傾けるイエスの姿が、豊かに見いだされます。
- 耳を傾けることは、個人の霊的同伴の場合、心理的次元を超え、霊的、宗教的な次元を持つようになります。「ある方」を待つ道をたどるからです。
- そのためには、一定の内面の沈黙も必要になります。その出発点は、ありのまま相手を、その人の置かれている状況を受け入れることです。
- 特に思春期の子ども、若者、またその家族に向ける教育者としての私たちのまなざしは、すべての人の心に良いものがたくさんあることを肯定させてくれます⁴。その良い側面を、私たちは引き出さなければなりません。したがって、私たちにとって耳を傾けることは、忍耐強く聞くということよりはるかに深い意味を持つものでなければなりません。それは、相手が私たちに話す事柄、なぜ私たちに話すのかを、私たちが確実に深く理解するということです。その人、十代の若者や青年、その家族の心に最もかかっている関心事に注意を向けることです。

耳を傾けることによって私たちは、今日の若者が必要としていること、時には若者の親が必要としていること、あるいは司牧の現場で私たちの接する人々が必要としていることを正しく理解するようにならなければなりません。実際、若者またはその親、あるいはその両方が同伴を求めて私たちのもとに来ることはあまりありません。しかし、若者や親はしばしば何かの必要に駆られて、疑い、問題、緊急事態、困難、葛藤、緊張、行わなければならない決断、立ち向かわなければならない難しい状況に駆られて来ます。

私たちが教育者、福音宣教者としての自分自身の養成の経験からよく知っていることですが、私たちの方から親しさを表すとき、関心を示すとき、私たちの方から会いに行き、彼らの必要に応える姿勢を示すなら、彼らが近づいてくれることが多くなります。この若者たちはテクノロジーとその可能性の世界に支配された“科学”の文化の申し子で、過剰に“つながった”世代に属しています。若者は「共感でき、彼らを支持し、励ましを与え、しかしながら、彼らが判断されていると感じることなく自分自身の限界を認識するよう助けてくれる人物を、探し求めています」。⁵

そのような出会い、形式張らない会話が時に、より深い、より豊かな成長の道に“扉を開く”かもしれないのはそのためなのです……。

イエスと、ただ水を汲むために井戸へ行った女性との出会いの中で、このことが起きたのでした。

傾聴のテクニックをここに提言すると言うつもりは少しもありませんが、しかしながら、本当の意味で耳を傾ける最もふさわしい姿勢を育みたいなら、次のことに気をつけなければならないことを強調したいと思います。

- ✓ 忍耐を欠いて、相手に話させずに自分が話してしまうことのないように。
- ✓ 会話を繰り返し中断することのないように注意すること。
- ✓ 賛同できないことがあるとき直情的に反応しないこと。
- ✓ 耳を傾けている相手に心向けることをおろそかにしないように。
- ✓ 私たち皆、誰もが、耳を傾けてもらうことを必要としていることを念頭におく。

耳を傾けているとき、次のことも同様に大切になります：

- 内に抱えているもの、時にその人にとって重荷や圧迫となっているものすべてを伝える機会を与えること。

⁴ «すべての子どもは何か良いものをもっています……教育者の第一の務めはその点、子どもの心の感受性の琴線を見いだすことです。». 参照 メモリエ・ピオグラフィケ V, 367 e 266, 第 23 回総会文書, N.º 151 に引用。

⁵ PD, 中央協議会誌 p. 8-9.

- 適切な質問をし、不信や対立を引き起こすかもしれない質問は避ける。
- 沈黙を穏やかに受けとめる。沈黙を不必要な助言や質問で埋めることなく、必要な時間をゆっくり取ること。沈黙の時はその人を楽にし、聞いていることを振りかえる余裕を与えるからです。
- あらゆるコミュニケーションの重要な要素である感情が“認識される”ようにする。
- 話しすぎる、言葉数が多いこと、すぐに解決策を見つけようとするのを避ける。大切なことは時間がかかること、プロセスをたどらなければならないことを忘れないようにしましょう。

耳を傾けることについて取り上げたこの箇所を、ドン・ボスコについて触れながら締めくくりたいと思います。耳を傾けることについて（識別や、共に歩むことについて）触れるとき私たちが今日使う言葉は、疑いようもなくドン・ボスコの文化的・宗教的背景に照らしたとき、かなり違ったものであるということがわかります。しかしながら、次の証言は非常に美しく、少年たちもほかの人たちも、ドン・ボスコに温かく迎えられ聞いてもらえたと感じたことがわかると思います：

「ドン・ボスコは数多くの重大な仕事を抱えていたにもかかわらず、特別に面談を願う若者たちをいつも父の心で温かく執務室に迎えた。実際、ドン・ボスコは、若者たちがごく親しい人のように自分と接することを願い、時折、彼らの遠慮のないふるまいに邪魔されても、決して文句を言わなかった……ドン・ボスコは、一人ひとりが全く自由に質問したり、重荷を打ち明けたり、自己弁護したり、謝ったりできるようにしていた。……

ドン・ボスコは、身分の高い人々に向ける同じ尊敬をもって若者たちを迎えた。長椅子に座るように招き、自分はテーブル横の椅子に座り、若者たちの打ち明けることがどれも非常に大切なことであるかのように、最大の注意を向けて耳を傾けるのだった。」⁶

II. 人を前進させる出会い：「識別」

耳を傾ける、識別、共に歩むというこの道を、手を取って導いてくれるこの箇所、イエスがサマリアの女と出会う箇所を読み進めると、次のようにあります：

「イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」

女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」（…）

イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。」（…）

女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」（ヨハネ4・10-15）

イエスは熟達した人の心の専門家として、人と出会うために、言葉、対話、仕草が持つ豊かさを存分に用いられます。

- ✓ イエスは質問を投げかけ、対話し、説明し、語り、対話の相手の視点に注意を向けます；提案し、確証し、相手の応答を呼び覚まします。
- ✓ イエスは名もないサマリアの女に、ご自分が彼女の想像も及ばないほど彼女の状況を理解していること、ある意味で彼女が耐えてきたにちがいない痛みと苦しみを感じ取っていることを、はっきりとわからせます。

⁶ メモリエ・ビオグラフィケ VI, 438-439.

- ✓ イエスは、女性を置かれている現実の状況、その曖昧な応答の前に立たせます；自らの最も内密な真実の前にさえも立たせます。女性が「私には夫はいません」と答えたときのように。
- ✓ 同時にイエスは、いつくしみに満ちた共感を彼女に示されます。
- ✓ イエスは対話を終わったものとして打ち切るようなことはされません、最初に遭う抵抗によってあきらめたりしません。
- ✓ 対話は誤解を解き、本当の自分を表す助けになります；謎のような、挑戦を投げかけるような応答は、近づきやすさを彼女に感じさせます。彼女は驚き、信頼を示し、人生をより良いものに変えることのできるものを真に望むようになります。

相手の善を求めるイエスは、倫理的な判断を下す非難やとがめだてをする代わりに、相手との関係を築きます。

- ✓ 相手を責める代わりに、話し、提案します。
- ✓ イエスの話し方、言葉は、対話の相手の心に語りかけるものです。
- ✓ イエスはサマリアの女との対話で穏やかに話をし、ご自分が彼女の人生を変えることのできる者だと性急に伝えようとはされません。特別でそれまでとは違う、より良い生き方を約束する水の源泉に近づけることへの興味を、少しずつ女性のうちに呼び覚まします。

* イエスは、人間性の専門家として、対話の相手の内面の世界に注意を向け、大きな関心を抱いておられます：相手の心を読み、詳しく見極め、どのように理解するべきかをご存知です。

信仰と愛の喜びへの召命

今日も、かつてサマリアの女がそうであったように、多くの若者が主に魅せられます。そしてこのように主に惹かれることは、信仰と、また息子、娘たち一人ひとりに向けられる神の呼びかけと密接に関連しています。人生を、愛の喜びへの召命として生きるようにという呼びかけです。信仰によって若者は、イエスのものの見方、他者の迎え方、他者との関係の持ち方、生き方に心を奪われたと感じます。それによって若者たちの人生は広がります。教皇フランシスコがよく言うように、「信仰は臆病者の避難所ではありません」⁷。

そして、聖霊によってドン・ボスコのうちに興されたサレジオのカリスマからあふれる、流れの水から汲む私たちにとり、識別をさらに進めるための出発点であるこの信仰の提案は、一つの確かなことに基づいています：神が私たちを愛し、若者を愛しておられると、私たちは心から信じています。私たちは、主イエスが「ご自分のいのち」を若者と分かち合いたいと望んでおられると心から信じます；そして聖霊が若者たちのうちにおられ、一人ひとりのうちに働いておられると信じます⁸。

「神に触れられる」ために心を開く若者たちの人生のうちに、徐々に、プロセスをたどって熟成する信仰の光は、若者をして「一人一人に対する神の深い愛の計画に気づく」⁹ ようにさせ、そうして「愛の喜びへの召命が、神がすべての若者の心に抱かせた、一人一人の存在が実を結ぶよう求める、根本的な招き」¹⁰であることを発見させます。

この歩みには、神のみ言葉との対話のうちに聖霊の声に心を開く姿勢が求められます。人間の知りうる最も親密な、聖なる場、すなわち良心のうちに。

⁷ 使徒的回勅『信仰の光』, 53.

⁸ 参照 第23回総会文書, 95.

⁹ PD, p. 13.

¹⁰ 同上

私たちは教育的、司牧的なまなざしをもって、若者が、あるいは結婚において夫婦が、家庭そのものが、しばしば差し迫った状況に端を発する探求の渇きに駆り立てられてこの道をたどるようになっていくことを、念頭に置かなければなりません。

- 人生に、信仰の観点からさえも、深い意味を付与する必要性を経験することへと、その人、若者、夫婦、家庭を至らせる状況。時にそれは、物事がうまくいかない、良くないことに強く気づかされる状況を私たちが経験するために起こります。
- その人が良くない状態の時、内面の調和がなく、自分の生きている状況に、あるいは結婚、家庭における“私たち”のうちに十全な意味を見いだせないとき。その状況は、“存在の虚しさ”に具体的に表れることがあります。しばしばそこから、方向性の喪失、病的な状態、悲哀、希望のなさなどが生じます。
- また、社会によっては、私たちはあまりに外面的に生きている、あるいは生きるようにさせられています。それはまるで、私たちがショーウインドーの中にいるかのようです。そこでは、限界や欠点はありませんという考え方を売り込んでいたり、“趣味わるい”ので、年を重ね年寄りになってはならなかったりするのです。生き方の深みと内面性を育む、耳を傾けることと対話、そのための教育、個人的、共同体的な歩みが、かつてないほど必要となっています。

識別の賜物

ここまで述べてきたこと、またそのほかのことは、教会の意向の正当性を確認させてくれます。シノドスの歩みを通して「若者に会う、若者に寄り添う、そしてすべての若者を一人残らず配慮するという教会の望み」を再確認し、「若者がこの世でさらされる孤立と排斥の中に彼らを捨て去ることをしない」¹¹ という意向です。このことから、耳を傾けることと共に、識別という賜物がいかに重要であるかに光を投げかけることができるようになります。識別は、教会の伝統においてさまざまな状況に適用されてきました：時のしるしの識別；倫理的行動の識別；キリスト者としての満ち満ちた生き方の道を求める場合の霊的識別；召命あるいは人生の選択における識別などです。

いずれにしても、主との対話と聖霊の声に耳を傾けることが常に不可欠です。なぜなら、先に指摘したように、「イエスという人物とイエスによって宣べ伝えられた福音が、多くの若者を魅了し続けている」¹² ということを私たちは認識していなければならないからです。

神に自由に呼ばれ、あるいは触れられるよう開かれた状態のすべての人に、なぜ識別の歩みを提案し、勧めるのでしょうか。それはただ、聖霊が一人ひとりの人生の出来事を通して、またほかの人の人生の出来事を通して、すべての人に語り、働きかけておられると私たちが認めているからです。聖霊はまた、さまざまな仲介を通して語られます；しかし、事実、体験、出来事などは、それ自体では何も語らなかつたり、あいまいであったりします。なぜなら、それらは常に、実に多様で主観的な解釈の下にあるからです。正しい方法でそれらに光を当てることは、識別の歩みの実りの一つです。

教皇フランシスコは『福音の喜び』に、時のしるしの考察を含む、識別のための三つの鍵を示しています。教皇パウロ六世がすでに示したとおりです¹³。この三つの鍵または基準は：認識、解釈、選択です。

¹¹ PD, p. 12.

¹² PD, p. 10.

¹³ パウロ六世、回勅『エクレジウム・スアム *Ecclesiam suam*』(1964年8月6日), 19: AAS 56 (1964), 632, 福音の喜び, 51に引用。

認識すること¹⁴、聖霊から来るものの光のうちに！

- ✓ 人生の浮き沈みの時にあっても精神の清明さがあること；大きな内的葛藤の時に。
- ✓ 人のうちにあるあらゆる感情の豊かさを引き出し、私たちが体験すること、私たちの内にあるものに名称を与える。
- ✓ 自分が体験することと自分の内の最も深いところにあるものとの間の協和音、あるいは不協和音の“味わい”をつかむ。
- ✓ 神のみ言葉の光に照らしながら、これらすべてについて黙想しなければなりません。その人の耳を傾ける能力と心の感受性そのものを中心に置き、沈黙さえも恐れることなく。
- ✓ すべてを、個人の成長の歩みの一環として受けとめる。

解釈すること¹⁵

- ✓ 神の霊が何へと呼んでおられるのかを理解する。聖霊が一人ひとりのうちに呼び覚まされることを通して。
- ✓ 人や自分自身を解釈することは非常に繊細さを要することであり、忍耐、目覚めた心、そしていくらかの学びが求められます。社会的、心理学的な条件づけがあることを認識しなければなりません。
- ✓ 現実を見ることが必要になると同時に、最小限のことで満足したり、楽なことへと流されたりすることなく、自分の賜物や可能性を認識する必要があります。
- ✓ 当然、この解釈の作業は、特定の条件のもとで、信じる人、キリスト者のうちに次のことを発展させうるものです：
 - 主との真の対話を培う（サマリアの女のイエスとの対話のように）。
 - その人のあらゆる能力を活性化させ、起こること、体験することに無関心であることがないようにすること（イエスとの対話がこの女性の心の中で反響していたように）。
 - 聖霊に聞くことに経験豊かな人に助けをもらう（福音のこの箇所の場合、導いたのはイエスご自身でした）。

選択すること¹⁶

こうして、その人、若者、夫婦、家庭 — 識別が家庭という環境で行われた場合 — が、個人としてあるいは共同体としての真の自由と責任を行使しながら、ふさわしく決断を行う時に至ります。

サマリアの女は、イエスを無視し、出会いによって何も起こらなかったかのように生活を続けるか、あるいは、イエスによって驚かされることを選び、同朋を呼びに行き、この人が自分の内面の世界の深みにまで触れたため感じた思いを伝えるほどに関わるか、心の中で選ばなければなりませんでした。

- ✓ 聖霊の光のうちに識別したときに行われた選択は、しばしば大きな自由をその人にもたらし、同時に、生き方の一貫性を求めます。
- ✓ そのため、次のことを確認できます。真に自由な責任ある人生の選択を行うことを、人々、特別な意味で若者に勧めることが、信仰と人間的成長の（そして考えうるかぎりあらゆる召命司牧の）旅路における、あらゆる真剣な識別の歩みの到着地点になります。

教皇フランシスコは言います。識別は「良心に取って代わるものであると装うことなく、良心の不可侵な地位¹⁷を守る主な手段です」¹⁸。サマリアの女との対話のうちに、真理と人生の内面に向かう彼女の旅路に同伴された、イエスの模範に倣いながら。

¹⁴ 参照 PD, p. 15.

¹⁵ 参照 PD, p. 16.

¹⁶ 参照 PD, p. 16-17.

¹⁷ PD, 英語・イタリア語版 p. 48; 中央協議会訳 p.17; ここは英語版から直接訳しました。

¹⁸ 使徒的勧告『愛のよろこび』, 37.

III. 人生を変える出会い：“共に歩む同伴”

「ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。(…)

さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるように頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」(ヨハネ 4・27-30, 39-42)

- このサマリア人の女性は、「サマリアの女」として福音の場面に登場し、「生きた水の源を知り」、その場面を後にします。自分に起きたことを同朋に告げるため、走って行く必要に駆られるほどになっています。そのあかしを通して、多くの人々がイエスに近づくようになります。
- 女は水がめを捨て置き、この人のことを同朋に話そうと村へ走って行きます。そして、重要な問いかけを村人にします：「イスラエルがこれほど長いあいだ待っていたのは、この人ではないでしょうか」。
- もう一方で、イエスは、文脈から推測できるように、ご自分が父のみ旨を果たしていること、そのみ旨はイエスのいのちの「いのち」であり、それを人々に伝達したいと望んでおられることを弟子たちに理解させます。
- サマリアの女の場合のように、イエスは出会う人々に知識や学習講座を提供するのではなく、むしろ、成長し人生を変えるための提案を差し出します。律法に由来する知恵の象徴であるこの“ヤコブの井戸”は価値を失い、“生きた水”に取って代わられます。
- イエスとの出会いの中で伝えられる神の姿は、無表情な、遠い、哲学上の冷たい神ではありません。その反対に、いのちを与える神、父と呼ぶことのできる神、霊であるので（霊と真理のうちに礼拝する）、どこかに閉じ込められたり、操られたり、所有されたりしない神をイエスは明かされます。
- この出会いの結末は、ふつうの終わり方の予想を超えていきます。すなわち、女が水がめを水で満たし、日常生活に戻るといった終わり方です。その反対に、同朋を呼びに行くために女が空のまま放っていく水がめは、失ったものではなく、得たものについて私たちに語るのです。

イエスのように共に歩む

聖書には、神が共に歩んでくださることを第一に伝える、数多くの物語があります。共に歩んでくださることを、神は時を超えて民に約束されます。

二つの契約の境界に、福音書の最初の霊的同伴者として洗礼者ヨハネが登場します。イエスご自身よりも前にヨハネはあかしをし、道を備えることができました。神がその心に語りかけられたからです。

イエスご自身、新約聖書の数多くの場面で、同時代の人々と交流し親しく出会うため、道行く人々の隣人、同伴者になります。

主のサマリアの女との出会いは、神の霊がいかにかにすべての人、男性、女性の心のうちに働きうるかを示しています：その弱さと罪のためにしばしば混乱し、分裂し、「さまざまに異なるもの、互いに相反するものにさえ惹かれる」¹⁹人間の心のうちに。

この人間の現実を前にするとき、主の現存と、主の求めておられること、主の呼びかけに気づかせてくれる道具や手段を、信じる人に提供する個人の同伴は、キリスト教の霊的伝統の非常に有効な手段として浮かび上がります。

同伴をどのように定義できるでしょうか。「『いのち』を喜んで迎え、人生を共に歩むため、共に歩む仲間同士の恒常的な対話の形として」²⁰；障害物があればそれを乗り越えるように助けながら、その人と主の間の絆を育むことがその最終目標である対話。

当時の人々との出会いの中でイエスがなされたように、あらゆる同伴の体験には、次のことが必要です：

- ✓ 愛のまなざし。12 人を召し出すため呼びかけられたときのイエスのまなざし（ヨハネ 1・35-51）。
- ✓ 権威ある言葉。カファルナウムの会堂で語られたイエスの言葉のように（ルカ 4・32）。
- ✓ 隣人になる心。サマリアの女との出会いにおけるイエスのように（ヨハネ 4・3-34.39-42）
- ✓ 共に歩むこと、旅の道連れになることを選ぶ。エマオの弟子たちと共に歩んだイエスのように（ルカ 24・13-35）。

私たちにとり、十代の若者や青年、その家族、一般のおとなと共に歩むことには、次のことが伴います：

- その人の歩んでいる道、どの地点まで来ているか、どこへ向かっているかを知ること。共に歩むことができるように。
- 出会いが一方的なものではなく、人間的な関係、人間らしさを育む関係のための機会となるように心がける。サレジオの教育における出会いの重要性を私たちはよく認識しています。それは、互いを知っていること、相手の善益を求めること、理解、共感、信頼に基づく関わりをもって、若者や一人ひとりの人、その人自身に目を注ぎます。そして、ドン・ボスコがこのことにおいて並外れた、比類のない教え手であったことを私たちは知っています。
- 耳を傾ける姿勢をもって（同伴の基礎である耳を傾ける術 ^{すべ}art について、ここでまた取り上げています！）。耳を傾けることにより、その人の現実の姿、歩んでいる道、その人の置かれている痛み、希望の不足、疲れ、あるいは探求の状況、また心に秘められた夢、願望、理想などを知り、理解することが可能になります。
- その出会いは常に、仲介のための出会いです。なぜなら、真の同伴者は聖霊だからです。神秘家十字架の聖ヨハネは次のように書き、このことを力強く確認しています：「この指導者たちは、自分自身が靈魂のための主たる働き手、導き手、動かす者ではなく、このことにおける主たる導き手は、靈魂のために決して注意を怠らない聖霊であることを思うべきである。」²¹ それは、私たちの教育、司牧、福音宣教の活動全体の旅の同伴

¹⁹ 参照 PD 英語・イタリア語版, p. 50; 中央協議会訳 p.18; 英語版から直接訳。

²⁰ L. ARRIETA, *Aquel que acompaña sale al encuentro y regala preguntas de vida para andar el camino* (Apuntes provisionales). Simposio CCEE, Barcelona, 2017, 11. 以下も参照：P. チャーベス・ピラヌエバ, ストレナ解説。「来なさい、そうすればわかる」(ヨハネ 1,39). 召命司牧の必要性, 最高評議会報 409 (2011), p. 33-36; M. A. GARCÍA, *L'accompagnamento personale nella proposta educativo-pastorale salesiana*, pp. 261-282, in F. ATTARD-M. A. GARCÍA (A CURA DI), *L'accompagnamento spirituale*, Elle Di Ci, Torino 2014, 349.

²¹ 十字架の聖ヨハネ, 愛の生ける炎 *The Living Flame of Love* 3,46 in F. ATTARD-M. A. GARCÍA (A CURA DI), *L'accompagnamento spirituale*, Elle Di Ci, Torino 2014, 268.

者は聖霊なのだということを、何度繰り返しても言い足りないからです。

- 同伴者、道を共に歩む人は、同伴される人のうちに働かれる聖霊の働きをあかしし、告げる人でなければなりません。しかし、近く寄り添いながらも控えめな姿勢で、自分の持ち場だけに身をおき、ほかの人の場を占めないように。実に、教育者、福音宣教師は、まず主と出会うという、土台となる体験によって、霊的同伴者として養成されます。このことは、次の事実から実にはっきりしており、明白で、根本的です。「信仰のまことの教育者とは、ある時点で自らを脇に置き、身を引いて、あの“何もない空間”を作り出さなくてはならない人である。主だけが占めることのできる“何もない空間”を」²²。同伴の実り、結果として、若者、同伴されている人が、神との真の絆を築けるように、あるいは神との出会いを果たせるようにするためです。
- 神が私たちの体験のうちにご自身をあらわされることを発見する。神が私たちに会いに来られ、驚かされるほどに。
- 率先して働かれるのはいつも神であること；また私たちに責任と自由があることを意識する。

若者の教育者、霊的指導者であるドン・ボスコ²³

教育者ドン・ボスコについて語ることは、ドン・ボスコの教育の使命と若者の霊的同伴の間の密接な関係に、そして若者の養成におけるその関係の重要性に光を当て、それを意識することを意味します。

ごく簡潔に述べ、本質的なことだけを強調するため、大きな価値があると私が思ういくつかの要素に光を当てます。

- ✓ ドン・ボスコは、見事な直観をもって、豊かな教育的提案や人間的絆に満ちた魅力的で教育的な環境を創り出すことに心を砕いた、福音宣教師の教育者です；ドン・ボスコは決してあきらめることなく、若者たちのキリスト者としての養成において、具体的な歩みを漸進的に進めます。
- ✓ ドン・ボスコは私たちにとり、子どもたちの見事な同伴者です。なぜなら、個人的な対話やゆるしの秘跡（当時はただ告解と呼ばれていた）の執行にとどまらず、あらゆることを、教育的働きかけや日常生活のさまざまな場面のほかの要素との関連性のうちに、それらと一つに結ばれたものとして、とらえるからです
- ✓ ドン・ボスコのスタイルでは、同伴する人、される人の双方が、特定的话题を決めて設定された日時に会うという形にとどまらず、日常的に同じ環境、遊ぶ空間、仕事、祈り、喜びの時を共有します。
- ✓ ここから、互いを知ること、信頼、そして友情さえも容易に生まれると考えられます；それは、信頼と進んで導きを受けることを後押しする環境でした。
- ✓ ドン・ボスコにおいて霊的父性は、教育者の父性の結実、豊かな実りであり、ドン・ボスコのもとにいる子どもたちは日常的にそれを享受します。次の言葉は、この父性を見

²² R. SALA, *Pastorale Giovanile 1, Evangelizzazione e educazione dei giovani*, LAS, Roma 2017, p. 391.

²³ すでに豊富にある内容豊かなサレジオの文献を参照することを勧めます。特に次の文献を挙げます：A. GIRAUO, *Direzione spirituale in San Giovanni Bosco*, in F. ATTARD-M. A. GARCIA (A CURA DI), *L'accompagnamento spirituale*, Elle Di Ci, Torino 2014, pp. 148-172; P. チャーベス・ピラヌエバ, ストレナ解説「来なさい、そうすればわかる」(ヨハネ 1,39), *召命司牧の必要性*, 最高評議会報 409 (2011), p. 9-16; フアン E. ベッキ, *Spiritualità Salesiana*, Elle Di Ci, Torino, pp. 22-36, 117-124, 173-174; DICASTERO PER LA PASTORALE GIOVANILE SALESIANA, *La Pastorale Giovanile Salesiana. Quadro di Riferimento*, Roma 2014, 3 ediz., pp. 24-25, 78-103, 114-117; E. ALBURQUERQUE (COORD.), *Espiritualidad Salesiana. 40 palabras clave*, CCS, Madrid, 77-82.

事に語っています：「少年一人ひとりを愛情をもって温かく迎え、支え、導き、教育し、共同体の中で、また日常生活の務めにおいて自分にできることを精一杯尽くすよう励ますのは、聴罪司祭、靈的指導者としてのドン・ボスコである。ドン・ボスコの傍らにはアシステンテ、教育者、若い友人たちがいて、触発される実り豊かな対話のうちに、同じ倫理的緊張感、靈的価値観を分かち合うことができる。」²⁴

つまり、ドン・ボスコにとり、感情表現の豊かさ、信頼、共感を生み出すことが、彼の教育法の基本的な条件になります。

- ✓ ドン・ボスコは常に、いつでも、教育者ですが、子どもたちに食べ物、健康、教育を提供するだけではありません。ドン・ボスコの教育の取り組みは、子どもたちのキリスト者としての教育へと常に方向づけられています。このことから、私たちは次のことを確認できるのです。「キリスト者の完徳に向かう靈的同伴は、サレジオの教育の本質的な、なくてはならない要素である」²⁵。
- ✓ ドン・ボスコが同伴の際、子どもたち一人ひとりと常に同じ関係、絆を築くわけではなかったということは、私たちにとって大変参考になる光を与えてくれます。ドン・ボスコは「さまざまな色合い、度合い」をもって同伴を実践しました。日曜日の夕のオラトリオやゆるしの秘跡のときにだけ会う少年たちの状況は、ヴァルドッコで昼も夜も暮らす少年たち、その中の、召命への感性、開かれた姿勢の見られる少年たちの状況と同じではありませんでした。
- ✓ ドン・ボスコの特徴であったので「まさしく私たちのものでなければならない」特徴は、生活を共にする共同体を創り上げる歩みを、常にたどることです。信頼と友情を呼び覚ます誠実な出会い、継続的に共にいること、教育者の共感に満ちた近しさ（典型的なサレジオのアシステンツァ）が、青少年、若者、大人から成るその共同体の常態的な特徴となります。

ドン・ボスコが常に、可能なかぎり目指していた目標は、「心を勝ち取ること」でした。すばらしいことです！ まことの福音宣教者、教育者においてこのことが何を意味するかただ考えてみてください、それは何とすばらしいことでしょう！

- ✓ ドン・ボスコにとって、どのような状況のもとで若者たちと出会おうと、ヴァルドッコの若者たちと共に差し出され、築き上げられなければならない教育的環境の特質こそが、一人ひとりのための最も効果的な同伴だったということも私たちは知っています。
- ✓ ドン・ボスコは教育活動の中で子どもたちを理解するように努め、思春期の子どものニーズや望みを意識するように努めます；そのため、この教育的関係において、若者は、理解され、温かく迎えられ、支えられ、愛されていると感じます。

子どもたちは、友人、教育者、父のような存在への信頼によって心を開き、新たな、魅力的な世界を見いださせてくれる道を、その人と共に歩むことを受け入れます。

幼いミケーレ・マゴーネの当初の抵抗は、大きな意味のある、また同時に光で照らしてくれる例を提供します。ドン・ボスコ自身が語るように、ミケーレは歌ったり、叫んだり、走り、飛び跳ねたりすること²⁶だけを楽しんでいましたが、動揺させられる“危機”に遭遇し回心したことにより²⁷、変化が起こります。ミケーレは大きな喜びを体験し、予期しなかった靈的歩みをたどりま

す。こういったことから、次のことを確認することができます。「ドン・ボスコは模範です：彼は

²⁴ A. GIRAUDO, 前掲書., p. 149.

²⁵ 同

²⁶ G. Bosco, *Cenno biografico sul giovanetto Magone Michele allievo dell'Oratorio di San Francesco di Sales*. Seconda edizione. Tipografia dell'Oratorio di San Francesco di Sales, Torino 1866, 15.

²⁷ 同, 16-24.

自らを教育者、聴罪司祭、靈的指導者と見なす傾きを持っています；温かく迎えること、善良さ、心の広さ、細部への注意、若者をして信頼を寄せさせ、心を開いて養成の働きかけに即座に、心から従う態度で協力させるほど、彼らに明確な愛情を示すことを、ドン・ボスコはあくまで要求します。」²⁸

これらすべては、プロセスをたどる教育法を通して達成されます。それは靈的伝統において広く見られるものです。「キリスト者の生活は、明確な深さ、豊かさの度合いにしたがい、漸進的にたどられるものであり、ますます大きな成長へと絶えず開かれています。」²⁹

- 内からも外からも強いられることがあってはならないプロセスに従って。
- たどられる歩みを意識し、それを自分のものとするまでに。その歩みを一人ひとりのうちに起こすのは聖霊なので。

IV. どのような司牧を目指す？

教皇フランシスコの提案する召命識別

ここまで述べてきたことすべては、私たちが受けとめなければならない提案や司牧の道を提供するものだと思います。シノドス準備文書が司牧の働きへ招いているという、そのこと自体から、私は注意を向けるべきいくつかの指針を示したいと思います。この文書は、「いかに真剣に司牧的配慮と召命の識別の課題に対処するかに目を向ける」³⁰よう私を招くのです。

これらの挑戦をサレジオのまなざしをもって真剣に取り上げることは、次の考察に言い換えることができるでしょう：

1. 今、**恵まれた好機**であることを私たちは認識しなければなりません。そして、決して心の休まることのない厳しい孤独のうちに道をたどるのではなく、誰かと一緒に道を歩むことを必要とし、それに同意する少年少女、若者、その家族、父親、母親たちとひきつづき共に歩まなくてはなりません。

ドン・ベッキは何年も前に書簡「今や、恵みの時」³¹にこのことを書いています。教皇フランシスコは使徒的勧告とこのシノドスの準備文書で、このことについて折々に述べています；私たちの多くも、自分の教育、司牧の体験からこのことを知っており、私自身、このストレンナを動機づけるものとして、強い確信をもってこのことを表明してきました。ドン・ベッキは書いています：「若い人たち一人ひとりと話してみると、キリストに徹底的に従うことについて、彼らがいかに考えているかがわかります。しかし、しばしば、彼らは応える準備ができておらず、すでに繰り返し言われてきたことですが、そのような召命を、生涯をかけて生き抜くという彼らの思いに見合うような現実の可能性に直面すると、決断できずにいます。」³²

2. 私たちはいつ何時も**召命の文化**を培わなくてはなりません。たとえ私たちにとって、困難と思われる文化的状況にあっても。

この言葉は、教皇ヨハネ・パウロ二世によって、第 30 回世界召命祈願日のメッセージで初めて使われました。

個人としての一貫性のある生き方の計画に向かう若者たちの歩みに同伴しながら、若者が自分を深く知り、一人ひとりのうちに語られる神の声に耳を傾ける際の開かれた心、惜しみない

²⁸ A. GIRAUDO, 前掲書, p. 160.

²⁹ S. DE FIORES: *Itinerario espiritual*, in S. DE FIORES - T. GOFFI - A. GUERRA (COORD.), *Nuevo Diccionario de Espiritualidad*, Paulinas, Madrid, 2004, p. 755.

³⁰ PD, p. 20.

³¹ フアン E. ベッキ, 総長書簡, 「今や、恵みの時」, 最高評議会報 373 (2000), サレジアニタ第 54 号 p. 41-98; 参照 P. チャーベス・ピラヌエバ, ストレンナ解説. 「来なさい、そうすればわかる」(ヨハネ 1,39). 召命司牧の必要性, 最高評議会報 409 (2011).

³² フアン E. ベッキ, 前掲書: 最高評議会報 373, p. 10; サレジアニタ第 54 号, p. 50

心をもって、人生に、現在そして未来に向かうよう助けることを、私たちは教育者、福音宣教師として提案します。

それは一部の人だけに、あたかもその人たちがエリートであるかのように向けられるのではなく、すべての人一人ひとりの満ち満ちた成長に向かう旅への神ご自身からの招き、呼びかけです。

無償性、自己贈与、他者に開かれ、神に開かれるといった価値が成熟する人生を生き、その人生について夢見る道を若者が見いだすようにと私たちは願います。この若者たちを、そしてこの旅路を歩むすべての人を助けたいと私たちは願っています。贈りもの、果たさなければならぬ役割として人生を理解できることを発見し³³、そのことによって幸せになるために。唯一の大切なものは自分自身だというメッセージを発信する文化の支配的な傾向を前にして、人生を贈りものとして理解することのうちに意味深い別の選択肢があるのを発見すること。神や他者という展望から見る人生の意味への応答として、誰もが「自分の丈に合い、自分の可能性に即している」と感じ、幸せだと感じる人生の計画にしたがって。

私たちはすべての若者にこのことを望んでいます。常に一人ひとりの人格への大いなる尊敬をもって、そして共に歩みながら若者たちの自由を求めつつ。

- イエスと親しい絆をもつために大いに役立つ**充実した霊的雰囲気**を育まなければなりません。五大陸の訪問によって、私はますます確信を深めました。世界中の“私たちの”若者の大多数、私たちが毎日出会う若者は、私たちのうちに住まわれる神、私たちの人格のうちに住まれ、私たちがその名によって若者のために生きる神を、私たちが示し、あかしするなら、心を開いてくれるという確信です。

時に、私たちの司牧活動に“成果”の見られないことがあるとすれば、それは私たち自身、より明確な提案をする勇気がないからなのかもしれないと、私は心から思っています。私たちは拒絶にあうことを恐れ、誰の邪魔にもならない提案を差し出す“生ぬるい道”に留まることを選んでいるかもしれません。

世界中の私たちのもとにいる若者たちは**霊性に渴いている、超越的なものに、神に渴いている**と、私はますます確信しています。たとえ彼らが、それをどのように言い表せばよいのか、答えを私たちにどのように求めたらよいのか、時にわからなくとも。若者たちはドン・ボスコのもとで、神が自分たちを愛しておられること、一人ひとりのために幸せの計画、満ち満ちた人生の計画を持っておられることを、ほとんど自然に感じ、体験することを学びました

息子や娘、一人ひとりのための神の計画は変わっていません。いつまでも変わることがありません。したがって、この**霊的雰囲気**はますます必要になっており、それは神との、兄弟姉妹との親しい絆を通して培われ、若者たちと分かち合われる祈りによって、秘跡のうちに信仰を生きることによって養われます。

霊的雰囲気は、耳を傾けることによって、沈黙のうちにみ言葉を迎えることによって、み言葉との対話、み言葉を分かち合うことによって養われます。マリアへの信心によって、この母、キリスト者の扶けマリアの愛を強く感じ、体験することによって養われます。

- 私たちはこの機会を**すべての若者に**、またそれを願うすべての人に、誰一人除外することなく、差し出さなければなりません。なぜなら、一人ひとりのうちに聖霊は働いておられるからです。

一人ひとりの召命は神が率先されるものだとは私たちは信じています。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」（ヨハネ 15・16）。一人ひとりの召命は受け取られる呼びかけ、賜物なので、神ご自身をおいてほかに、それを呼び覚ましたり生み出したりできる人はいません。しかしながら、私たちは召命に同伴しなければなりません。信仰が可能なかぎりその人自身のものとなる道；私たちが内面性において、また主イエスとの出会いにおいて成長する道を通して。

イエスが金持ちの若者に向けられた呼びかけとその応答は、神の呼びかけに建設的に応えるには熱心で誠実なだけでは十分でないことを理解させてくれます。この呼びかけに応えるため

³³ 参照 P. チャーバス・ピラスエバ、ストレンナ 2011 解説（日本語冊子版） p. 14-15.

に、その人の倫理的、精神的な次元は、まず何よりも霊的次元と信仰を必要とするのです。

この次元を生き抜くなら、若者はその呼びかけを人生の計画、一人ひとりへの神の夢として感じることができるようになり、あらゆる種類の召命の歩みにおいて彼らに同伴することが可能になります：信徒キリスト者の道、奉献生活、司祭職、在俗の奉献生活など。

5. **生き方の統合的なビジョン**を育む霊性を提案しなければなりません。これは、霊的遺産としてドン・ボスコから受けた「神との一致」を生きる私たちサレジオの霊性に、本来備わっているべき特徴です。

私たちの言う霊性は、ご自身を無償で与えられる神、キリストとの親しい出会い、一人ひとりのうちに働かれる聖霊に信仰をもって応える自由とが、密接に結ばれたものです。

若者のために聖霊における生き方のすばらしい教師であったドン・ボスコは、第一に教育的な霊性を若者たちと共に生き、霊的成熟に至る道を自然に生きられるよう若者を助けました。その道において、「神の現存は、呼吸すること、眠ること、考えることほど“自然”になる。それは“宗教的な”側面にとどまらず、生活全体に及ぶダイナミズムである」³⁴。

6. 私たちの生きる喜びをあかしする

キリスト者として真実な生き方をしたいと夢を抱き、神は自分に何を望んでおられるのかと考える若者は、私たちの熱意を目にしたい、自分もそれを体験したいと望んでいます。

「その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない」（ヨハネ 16・22）と主は言われます。このことは、主が私たちに出会いに来られたという体験を、私たち自身が、若者、大人、父親や母親が生きたことのあるとき可能になります。そしてその体験は、生きることの喜び、私たちの毎日の出会いを満たす前向きな明るさ、問題や逆境に立ち向かう際の穏やかな勇気のうちに表れなければなりません。人生を満たすもので、失望を表す生き方、元気も意欲もない状態ほど神から遠いものはありません。生き方と召命の識別において他者と共に歩む際、私たちは意味のある、信頼に足る拠りどころにならなければならないと、私が繰り返しここまで述べてきたのはそのためです。そうでなければ私たちの働きは、永続する、意義のある影響を人々の人生に何ら与えないままに終わるでしょう。

7. 「来なさい、そうすればわかる」³⁵に見られる論理

先述の五大陸の若者たちが、キリストに魅了されたなら、惹きつけられる道を歩むことは明らかです。先に触れた文書でドン・ベッキが言うように、若者は私たちの事業や組織、構造、私たちの働きにさえ魅了されることはないでしょう。せいぜいいくらかの時間を、もしかすると数年をアニメーターやボランティアとしてささげることができるかもしれませんが、イエス・キリストが呼び覚ます深さと魅力を発見しなければ、遅かれ早かれもっと満足を与えてくれるものを探して去って行ってしまおうでしょう。同じことが男子、女子の修道者、若い司祭について言えます。したがって、イエスの名における福音的兄弟愛、私たちが「自分たちのものであると強く感じる」家庭的精神、家族的な親しさに満ちた雰囲気、祈り、自分たちの生きている小さなこと、また大きなことを共にあかしすることが、個人の探求と神の呼びかけへの「はい」という応答に意味を与えるのです。その“さらなるもの”が人を惹きつけるのです。「預言、意味、基本的価値の構成要素となるようなプラス・アルファ、あるいは、インスピレーションや、生涯をかけたいとの望みを引き起こすような“温かい体験”とでも呼べるもの」³⁶です。

この「来なさい、そうすればわかる」の呼びかけに足りないのは、教会におけるあらゆる召命識別のために、沈黙のあかし、召命についての沈黙だけでは、神によって呼び覚まされた召命が具体的なものとなるには十分ではないという認識でしょう。個人的に招くこと、一

³⁴ M. A. GARCÍA MORCUENDE, *La educación es cosa de corazones*. PPC, Madrid 2017, p. 109.

³⁵ 参照 ヨハネ福音書 1 章 39 節およびファン E. ベッキ, 前掲書: 最高評議会報 373, p. 25-26; サレジアニタ 373, p. 71-

73

³⁶ ファン E. ベッキ, 前掲書: 最高評議会報 373, p. 26; サレジアニタ第 54 号 p. 73

人ひとりに合う道を提案することが、「来なさい、そうすればわかる」の一環とならなければなりません。

8. サレジオ的な同伴 - 個人やその人の身近なことに焦点を当てるだけでなく、共同体的でもあるスタイル

私たちサレジオのスタイルでは、同伴、共に歩むことについて語るとき、それは個人的な対話を指すだけでなく、生きている価値や体験を内面化するように、その人、特に若者を助ける、より広い、より豊かな現実を指します。その中でも、他者への奉仕と最も助けを必要とする人々との連帯は、大きな重要性をもちます。

すでにドン・ボスコの場合そうであったように、同伴は教育的環境から始まります。さまざまな提案や人間的成長、召命の成長がその人のものとなるよう、内面化を促す教育的環境です。

個人的な、系統立てられた対話の機会に加え、折々のちょっとした出会い、ほかの人々、キリスト者共同体、信仰のグループ、修道共同体そのものとの気取らない家庭的な出会いも、この歩みにおいて決定的です。

V. サマリアの女と共に

サマリアの女が同朋のもとへ行き、自分を魅了し、最も深い真実において自分自身と出会えるように助けてくださった方について語りながら、私たちの手をも取って導いてくれるかもしれないと想像しながら、私はこの解説を終えたいと思います。そして：

→サマリアの女は私たちをヤコブの井戸、イエスと出会った井戸へと案内します。私たちの抵抗を前にして、自分たちの知らないことにふたをし、安楽と安心の領域に根を下ろしている私たちを前にして、ご自分があきらめることはないと理解させたイエスと出会った井戸；自分たちの最も深い渇きを発見するよう私たちを導くまで、イエスは私たちのそばにとどまられます。

→最も深く抱いている理想を、何ものにも、誰にもかき消されないようにとサマリアの女は私たちに呼びかけるでしょう。宣教召命の歩み、あるいは結婚生活、修道奉獻、司祭職、信徒としての奉獻の歩みの初めに、私たちを熱意で満たしたその理想を。

→サマリアの女は、神から来る“贈りもの”にいつも開かれているために、できるかぎりのことをするようにと、きっと私たちに勧めるでしょう；私たち自身の限界のため、決して完全に見だし尽くすことのできない、完全な私たちで味わってはいない賜物に。

→サマリアの女は、自分の体験から出発して、互いに同伴することの大切さ、信仰において互いを導き、支え合うことの大切さを、私たちに納得させてくれるでしょう。

→そしてサマリアの女は、より人間らしい生き方を、またもしかすると前よりももう少し“人間の専門家”になることさえも、イエスからどのように学んだか分かち合ってくれるでしょう。“人間の専門家”になることは、私たちにとって終わることのない挑戦です。

“一人ひとりに関わられる”神 - マリアの自由の扉を深い細やかさをもって叩かれ、人間的には不可能なことを実り豊かにされた神 - との出会い、そのお告げの新しさを生きたマリアのように、私たちも、自分の信仰について、いのちの永続的な新しさである神のうちに“自分を明け渡すこと”について自らに問うよう、そして心を開いて聖霊に運ばれるよう、招かれています。

私たちがこの道をたどれるように、そしてこの道を歩めるよう若者を助けることができるように、主が助けてくださいますように。

すべての若者の心、夫婦、家庭、探し求めるすべての人のうちに響く主のみ言葉、必ずしもすぐに理解できるように響くわけではないみ言葉の真実な仲介者となる恵みを、私たちの母が私たちのために得てくださいますように。

キリスト者の扶け聖マリアの御子への取りなしと、ドン・ボスコの、また聖性の誉れへの途上にある私たちの家族皆の加護を祈り求めつつ、皆さんにごあいさつを送り、皆さんの幸いをお祈りします。

2018年1月1日 ローマにて
総長 アンヘル・フェルナンデス・アルティメ神父, SDB